

文部科学大臣奨励賞

「私の韓国語奮闘記」

キム ギョンヒ (金 徑希)

Ms. Kim Gyeonghee

(韓国・大学職員)

長崎国際大学国際交流・留学生支援センターで留学生支援と海外大学との交流業務を担当しています。市民講座の韓国語講師として登録し、韓国の文化を広げていくことにやりがいを感じています。



日本に来て感じたことは、日本人は意外と外国のことをあまり知らないということでした。例えば、周りの人からこんなことを聞かれた時は少しびっくりしました。「ね、韓国にも海あるの?」「あのさ、日本と韓国って時差どの位あるの?」「ね、ね、韓国の人もお米食べる?」

私が今住んでいる長崎県から、実家がある釜山まで、最寄りの国際空港から飛行機でたった30分、船だと3時間あまりで行ける、とても近い距離にあるお隣の国なのに、日本の皆さんはどして韓国について基本的なことも知らないんだろう?と不思議に思いました。

そこで、せっかく日本に来ているのだから、もっと韓国のことを広げようと決心した私は、韓国語講座を開いて韓国語や韓国の文化を1人でも多くの日本人に教えていくことを計画しました。しかし、私の目標はそうまくいきませんでした。仕事が休みの日は、教室を借りる為、近くの公民館を回ったのですが、「え?韓国語講座?興味ある人おるかね?」「うちは、年配の人ばかりで語学なんかじゃ人集まらんよ!」と門前払いされてしまいました。実は、これは今から10年も前の出来事です。

皆さん。2002年に日韓両国で共同開催した「サッカーワールドカップ大会」を覚えていらっしゃいますか。あの国際大会を契機として、今、日本と韓国では、映画や音楽、ドラマなどの大衆文化が解放され、日本では「韓流」ブームが、韓国では「日流」ブームが巻き起こることになりました。そして、両国の多くの人々が双方の国を往来し、様々な方面から国際交流が行われるようになりました。テレビでは、1日中韓国ドラマが流れていて、昔懐かしい青春を振り返らせてくれる純愛ドラマに、多くの日本のお母さん、お父さん達は、テレビにくぎ付けとなりました。

このような状況から、私が目標としていた地域での韓国語講座は一気に数か所で開かれるようになりました。仕事の傍ら、夜は公民館などで韓国語を通して韓国の文化や習慣、韓国人の生活ぶりを紹介し、楽しく勉強しています。講座を受ける皆さんは、年齢も職業も幅広く、韓国に対する思いや、勉強の動機もそれぞれ違っていたのですが、やる気だけは誰にも負けていません。「韓国に友達がいるので少しでも韓国語で会話できるようになりたい!」、「韓国に旅行した時、メニューが読めるようになりたいです!」、「あのヨン様の優しく滑らかな言葉を字幕なしで聞き取れるようになりたい!」

ところが、受講生のほとんどは年配の方で、教室では面白い風景が次から次へと講師の私を

戸惑わせるのです。「先生、ハングルって難しか〜！縦棒の上向いとるか下向いとるかちょっと見えんばい」「この年になったらもう頭に入らんと。さっき部屋で覚えたつもりが、台所入ったらもう忘れとるとさ」「あら〜ヨン様ってこげん難しか言葉ばしゃべりよったとね？ドラマみよる時はすーって耳に入るとばってんね」

一生懸命準備して行ったものをなかなか覚えてもらえず、やる気も失せてきて、時には落ち込んだり、時には苛立つこともありました。その頃、年末休みを利用して1年ぶりに実家へ帰省することになりました。家に帰ったら受講生達の覚えの悪さを家族のみんなに愚痴ってこようと、心の中に決めていました。

そう思っていた私に、久しぶりに会う実家の母が目の前で広げて見せてくれたものは、なんと、びっしりとメモ書きした日本語のテキストとノートでした。母は、日本にいる娘が使っている言葉を少しでも理解しようと、また娘がお世話になっているたくさんの日本人の方々と出来る限り交流を深めようと思って、日本語教室に通っていたのです。母は、「日本語はね、本当に難しいのよ。ひらがなにかたかなに、漢字まであって大変なのよ。覚えたつもりがなかなかね・・・でも、楽しいからこれからも教室は休まないわ。」と顔に微笑みを浮かばせて話していました。

母の言葉と笑顔には、日本で韓国語を学んでいる皆さんと共通するものがありました。教えるということは実は教えられること。私は、今まで気付かなかった大切なことを母に教えてもらった気がしました。会話の上達はともあれ、少しでも覚えられたらお互いもっと近づくことができる。相手の国のことを知りたい、もっと深く理解したい。覚えることに悪戦苦闘しながらも、諦めないで楽しく勉強を続けている皆さんの気持ちがやっとなら理解できるようになりました。

日本と韓国はとても近い国です。しかも近さは距離だけではありません。今や、両国の人たちの心と心の距離も非常に近く、たくさんの方が韓国のことを、逆に日本のことを深く知ろうと一生懸命取り組んでいます。韓国語講座の皆さんや、日本語教室に通っている母のような人がこれからもどんどん増えていくことを願ってやみません。また、そうなれるように、私にできることをこれからも頑張っていきたいと思います。日本と韓国両国の明るい未来に夢と希望を抱いて、難しい韓国語を一生懸命に頑張っている皆さんにエールを送りながら、私はこれからも教室へ向かいます。